江戸川大学国立公園研究所から

執筆担当：伊藤太一

はじめに

一九四八年の設立時はIUPN（International Union for the Protection of Nature）すなわち、「国際自然保護連合」であった。しかし、一九五二年の第三回総会（カラカス）における「コンサベーション（conservation）」に関する議論を踏まえて、一九五六年の第五回総会（エジンバラ）で「自然及び天然資源の保全に関する国際連合（International Union for Conservation of Nature and Natural Resources）」に変更した。だが、日本では「自然保護」が恣意的に残され、IUCNを「国際自然保護連合」のままとした。そこで、日本ではなぜコンサベーションが（環境）保全ではなく自然保護になったのか、國立公園誌の記事から分析してみよう。

一・国立公園協会とIUPN

戦後の国立公園や文化財行政の展開は、GHQ民間情報局美術記念物課のポパム（Walter Desmond Popham 一八九八-一九七九）の一九四六年から一九五二年三月までの六年間の活動に多くを負っている。

米国国立公園局のランドスケープアーキテクトであったポパムの要請でリッチー（Charles A. Richey 生年不明-一九七〇）が一九四八年四月八日に来日し、田村剛・石神甲太郎らと大山を除く一二カ所の国立公園と六カ所の候補地を調査し八月一一日に帰国した。その二カ月後IUPNが設立されている。

一二月にはGHQにリッチー報告が届き、一九四九年二月には国立公園部に転送され、国立公園行政に大きな影響を及ぼす。一九五〇年の國立公園誌四月号で東良三がIUPNを「国際自然保護連盟」として紹介し、その設立の経緯を解説している。この記事を反映してか、同誌六月号には四月一七日に新宿御苑で開催された尾瀬保存期成同盟の第四回会合において、「国立公園協会の中に同盟をおいて、IUPNのブランチ」にするという意見が出たことが報じられている。

一九五一年六月四日には国立公園協会がIUPNに加盟し、國立公園誌七月号に「国際自然保護連合（IUPN）に加盟」と掲載された。一〇月一日には協会内に民間有志による「日本自然保護協会」が発足し、その英訳は、IUPNを意識してか、"Japan Society for the Protection of Nature"となっている。このころ、田村はIUPN総会の日本開催希望をリッチーに伝え、リッチーから米国国立公園協会経由でクーリッジ（Harold J. Coolidge Jr. 一九〇四-一九八五）IUPN副会長へ、さらにベルギーのアロワ（Jean-Paul Harroy 一九〇九-一九九五）IUPN事務総長に伝えられた。

一九五二年一月二五日付でIUPNより第三回総会（カラカス）出席依頼状が、四月二八日付でアロワ事務総長から総会参加を促す手紙が田村に届き、さらに、七月には「電力開発と自然保護」報告書送付要請も届く。国立公園協会はカラカスには代表を派遣できないとしたが、英文報告書は発送した。その後、米国で開催される国際地理学会に参加する神戸大学の田中薫がベネズエラまで足を伸ばし、九月上旬の第三回総会に代理参加した。

一九五三年三月にはクーリッジIUPN副会長が来日し、田村らと親交を深めた。だが、一九五四年の第四回総会（コペンハーゲン）にも国立公園協会として代表を派遣することはできず、スウェーデンで開催される国際植物学会に参加する北海道大学の館脇操に代理出席を依頼した。

二・IUPNからIUCNへ

一九五六年六月には第五回総会がエジンバラで開催され、上野動物園長古賀忠通が代理出席した。國立公園誌九／一〇月号のニュース欄には、「IUPNがIUC

（自然及び自然資源の保護に関する国際連合）と改称される」および「国際保存連合-旧国際自然保護連合-第五回総会」という二つの記事が掲載され、「『自然の保護』なることばによって、連合の立場が不利になるという強い感情の結果であった」と名称変更理由を説明している。この時点でコンサベーションが「保全」ではなく、「保存」や「保護」と訳されていることが分かる。

田村らはその後もＩＵＣＮを「国際自然保護連合」と呼び、「国際保存連合」も「ＩＵＣ」も定着しなかった。一九五八年にＩＵＣＮ第六回総会（アテネ）に初めて出席した田村は名誉会員となり、暫定国立公園委員会の設立メンバーにもなっている。

三．コンサベーションの理解

カラカス総会に代理参加した田中は、その二年後の一九五四年の國立公園誌一二月号に「コンサヴェーションについて」を発表し、「『保全』の語義を超えて、『前進』、『増進』などの語義をも持っていると考えられる」と述べる。

一九五九年一〇月三日に日本学術会議主催の「自然保護に関するシンポジウム」が開催され、田村は、「自然及び自然資源の保護Conservationは」、「国際的に検討さるべき重要課題」と述べる。一方で、科学技術庁審議官安芸皎一は「コンサーベーションについての諸問題」として米国で一九二〇年代の農地の土壌荒廃から使われるようになり、農業や水産業における「持続的な生産を可能にする手段」として紹介している。

四．日本自然保護協会とＩＵＣＮ

日本自然保護協会は一九六〇年七月一三日に財団法人となり、ＩＵＣＮに加盟するが、これを記念して一九六〇年の國立公園誌五月号は「自然保護特集（Special Issue for the Nature Protection Policy in Japan）」として、ＩＵＣＮ国立公園国際委員会のクーリッジ委員長や日本自然保護協会会長となる川北禎一からのメッセージを掲載している。川北は加盟を予定している「国際自然保護連合」のモットー、「自然保存と生産活動とは同盟者であって敵同士ではない（Conservation and Production are allies, not rivals）」を紹介している。ここでコンサベーションは「自然保存」とされ、日本自然保護協会は“Nature Protection Society of Japan”と訳が変更されている。ＩＵＰＮの時代に国立公園協会は加入し、日本自然保護協会はＩＵＰＮのブランチになることを想定して協会内に設立されたが、一九六〇年に加盟した際にはＩＵＣＮとなっていた。そこで日本自然保護協会は再び英訳を変更し、“Nature Conservation Society of Japan”としてＩＵＣＮに登録した。

おわりに

日本の関係者はコンサベーションの意味を考えずに、ドイツ語の“Naturschutz”を訳した「自然保護」をそのまま使用し、日本自然保護協会を「日本（環境）保全協会」にしなかった。一九七一年に環境庁が設立された折には自然保護局は“Nature Conservation Bureau”と訳された。さらに、一九八〇年の「世界（環境）保全戦略（World Conservation Strategies）」は「世界自然保護戦略」、一九九六年からの「世界（環境）保全会議（World Conservation Congress）」は「世界自然保護会議」とした。「世界野生生物基金（World Wildlife Fund）」が「自然のための世界基金（World Wide Fund for Nature）」に改称されたときも「世界自然保護基金」と恣意的に訳された。「環境庁自然保護局」が「環境省自然環境局」になってから二〇年以上を経たのだから、そろそろ「自然保護」では限定的すぎるということで「コンサベーション」を一九五六年に導入したクーリッジらの思いを見直す必要があろう。

伊藤　太一●いとう　たいいち
伊藤は一九八八年ころに米国内務省図書館でリッチー報告に出会ったが、一九四八年に日光国立公園でリッチーを案内した千家哲磨は、一九五三年七月に内務省国立公園局でリッチーに再会している。彼はそのころ「ホワイト・サンズ国家記念物（現国立公園）」の歴史地区の文化的景観デザインを担当していた。さらに、千家と石神は一九七〇年六月二七日ごろに「レーク・ミード国立休養地」で、リッチーとその家族に会っているが、その一カ月後にリッチーは永眠した。一九七〇年の國立公園誌には田村、石神によるリッチー追悼記事が掲載されている。